世界は記録と神様と

3608

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
世界は記録と神様と

【Ｎコード】
Ｎ８８９０Ｗ

【作者名】
３６０８

【あらすじ】
日比谷蓮は面倒なことが嫌いな高校二年生。ただ一つ、おかしな明晰夢を見ることを除けば。そんな蓮が日常の中で出会ったのは名無しの無口でファンタジーな少女。その子の関わって蓮が経験したことは化け物に襲われて、双銃少女に助けられて、死んで生き返って、異世界に行って！？　蓮に何が起こった？　この先どうなる？
それを決めるのは蓮の意志とその場の成り行きと！？　蓮の日常と常識が覆される物語と言った感じです。

名無しの少女（前書き）

素人ですがご容赦ください。

名無しの少女

代行者から主へ。
この世界ついての報告。
この世界の人間の特徴について。
まず第一に欲望が深く、それを満たすためならば他者の犠牲もいとわず、人間以外の動植物は食い物となっている。
第二に、肉体が脆く、外的要因によって簡単に命を落とす。
第三に、非常に好戦的で過去に何度も戦いを起こしている。ただし、その数々の戦乱の《記録(きろく)》の影響で現在は人間同士で何かの取り決めを行い戦いはここ数年起こってない模様。
この世界の様子について。
この世界自身の生命力は、前述した人間の、戦いの影響で不安定な状態であったが、近年は安定したもよう。ただし、自身の欲望を満たすため、世界自身の生命力は減少傾向にある。
その他の報告。
この世界の『歪み』が近年ここ数年で爆発的に増加している。
理由は不明。
以上報告終わり。
代行者として、この世界の観察を続けるものとする。

◆

夢を見ていた。
それはいつもの夢。
現実味がない、けれどリアルな夢。
今日も、その理由の分からない夢を誰かの視線で見ている。
そこは人がたくさんいた。

みんな椅子に座って前を向いて熱心になにかを机の上の紙に書き込んでいる。
前には大きめの黒板があり、かなり年をとっていそうな老人が黒板を指しながら何かを喋っている。
その様子から分かるように、ここは教室で今は授業の最中のようだ。
それは、俺のよく知るごく一般的な授業の光景だった。授業の夢を見る人間などあまりいないと思うが、まだ不思議な夢ではない。
周りの生徒と思しき人物が日本人にはありえない金や銀の髪を持つ人でなければ。
そこまではいい、俺はよく知らなくても海外の一般的な授業の風景かもしれない。
よく知らない風景を夢で見るのもおかしな話だが、まだありえない話ではない。現実にもあるであろう光景だからだ。
「魔法とは、体の中の魔力をさまざまな形で体外に出す行為のことをいい……」
しかし、教師の話す内容はこんなので、話を聞いている他の生徒や教師がみんなローブのようなものを着てまさに魔法使いといった風貌だったら世間で言う現実にある一般な授業風景とはいえないだろう。
現実にこんな魔法使いのような服が征服である学校があるはずがないし、まして魔法がうんたらすんたらなんてことを教える授業があるはずがない。
夢とは基本的に意味不明なものが多いらしい。
俺の見る夢も確かに意味不明だけど視界がやけにリアルではっきりとしていて、はっきりと夢だと分かる。いわゆる明晰夢というやつだ。
「魔法を使うだけなら誰しもが使うことが出来る。一言程度の呪文(スペル)で簡単に出来る。そして、長い呪文(スペル)を唱え、方陣などによって制御し、コントロールするのが魔法士と呼ばれるもので……」

認識できる夢と言うのは意外と面白いと思うかもしれない。
けど、はっきり言おう……全くつまらないと。
話の内容はさっぱり分からないし、何故かいつも体を動かしたり声を出したりすることが出来ない。つまり、完全に『見ているだけ』だ。
早く終わらないかなとボーっとその光景を眺めているとふと視界がゆがんだ。目が覚める兆候だ。
今回の夢はこれで終わりか。結構短かったな。
さて、現実に戻るか。現実では今何してたっけ。
そんなことを考えながら意識が闇に沈んでいった。

◆

目が覚めると、そこは教室だった。
一瞬夢が続いてるのかなと思ったけど、周りの生徒はみんな見慣れた制服を着て、黒板には見慣れた文字が書かれているのでちゃんと現実のようだ。
しかし、その生徒たちの視線は俺に注がれていて皆『あちゃ～』というような表情をしている。
そして俺の席のすぐ傍にはこれまた見慣れた古文の教師が立っていて顔は笑っているがよく見ると血管がピクピクしているのが見える。
この状況が指し示すこととは、
「6時限目の古文の授業だったが授業内容がまるで分からず、眠っていて今起きたということで……俺現在大ピンチ！」
バチンッ！！
教室に俺の頭が出席簿で叩かれた音が響き渡った。
「……まだひりひりする」
「あっひゃっひゃ！　いつ見てもおもしれえよな、炸裂出席簿」

「二年になってから通算五十回突破だね」
俺、日比谷蓮（ひびやれん）の言葉に親友その一の九十九植朔（つくもうえのり）は爆笑しながら、親友その二の東雲（しののめ）（下の名前は何故かずっと知らない）は微笑を含みながらそれぞれの反応を返していた。
そして爆笑していた植朔は少し真面目な顔になって、
「それで、寝てるとき何か呟いてたけど、またあれか？」
「……ああ」
植朔の質問に俺はそう答える。
「いつも思うけど、本当に不思議だね。そんなに見たことのない風景の明晰夢を見るなんて普通ないと思うんだけど」
「そうだよな～」
俺は多分ごく普通の高校生だ。
多分がつくのはそうだと断言できないからだ。
断言できない理由というのが俺がよく見る明晰夢だ。
俺はよく夢を見る。ありえないくらいの頻度で。しかも内容は鮮明でリアル。そして、その全部がいつも夢だと自覚できる明晰夢なのだ。
大概はおきたら内容は忘れているんだけど、いくつか記憶に残るものもある。世界がどーたらすんたら、魔法がどーたらすんたらファンタジーに出てきそうな内容ばかりだったが……。
このことを知っているのは親戚とこの二人のみだ。
別にひた隠しにするつもりはないけど、周りに喋るつもりもない。喋ったところでおかしな奴扱いされるだけだろう。
小学校のときはそれが分かっておらず、失敗して変な子供として扱われ孤立していった。
そんな俺に近づいてきた奇特な奴がこの二人だったのだが、それはまたいつか別のときに語ろう。
そんなことを考えていると植朔が突然――――
「おっ、あのお姉さん美人だなぁ～」
と言い出した。

「またかよ……」
「まただね」
相変わらずの脈絡のない駄々漏れの植朔心の声に俺は気だるそうに、東雲は苦笑しながら返す。
今の言葉によって一瞬で話題と空気が変えられた。こういうところは良くも悪くも植朔らしい。
「相変わらず蓮と東雲はそういうのに興味が薄いよなあ」
「別に、興味がねえわけじゃねえよ」
「僕も恋愛にはそれなりに興味があるさ」
そんなことを話しながら、放課後の住宅地を歩いていく。
こんなやり取りはもう日常だった。
学校一の秀才と名高い東雲、学校一のバカと名高い一弥、そして俺。
全員タイプがまるで違うのに、何故かずっとこの三人でつるんでいる。
夢以外は変わらない毎日だったが、俺はその日常は嫌いじゃなかった。
柄にもなくそんなことを考えていると、いつの間にか話題が美女の話から学校の話へシフトしていた。
ほんとにこいつらはすぐに話題を変えるな……。
「毎度思うけど、高校の勉強って将来何の役に立つんだろうなあ」
「それを言っちゃおしまいなんじゃ……」
「ただ単に授業が嫌なだけだろ」
俺がそう突っ込むと、
「うっ、まあそれは置いといて、明日って古文の課題の提出日だったよな。蓮、課題終わってるか？」
「えっ！？」
そんなの初耳だ。
「あ～」
「東雲、その残念だね的な『あ～』は止めろ！」

「……すまなかった」
「おまえも、その哀れむ視線をやめろ！」
二人のこんな態度には理由があった。
俺たち三人の通う神凪（かんなぎ）学園の教師は厳しいことで有名で、課題を忘れた生徒はその日の　放課後に補習を受けさせられるのだ。
それだけなら、このまま早めに家に帰って課題をやれば済む話なんだが、俺は荷物を減らすため、いつも教科書やノートを学校に置いてきている。
その上、
「冗談じゃねぇ。明日のバイト行かないと今月やばいんだよ……」
俺はある事情で現在一人暮らしだ。
そして生活費は自分でバイトして稼いでいる。さらに今月は予想以上に出費が多かったのでピンチだった。なので明日行く予定になっているバイトにいけないとなると正直やばい。
そうなると選択肢は一つだ。
「しゃーねー。ちょっくら取りに言ってくるわ。じゃーな」
といいながら踵を返す。
「おうっ、じゃあなっ」
「健闘を祈っているよ」
挨拶をして俺は走り出した。
少し走ると、この辺で一番でかい公園が見えてきた。
いつもは通らないんだけど、芝生や生垣を突っ切って直進すると近道になる。
（やれやれ、近道するか）
もう一度学校に行くのがこの上なく面倒だった俺は近道を通ることにした。
「ふぅっ」
生垣を抜けてきたこの場所は天ヶ瀬公園という社川（やしろがわ）市で昔からある自然の多い大きな公園で、百メートルはある巨大な木のことで有

名である。そして、周りが柵ではなく生垣で囲われているので俺は急いでいるときの近道にしている。
（さっさと取りに行かねえと）
課題を早めに終わらせたかった蓮は早足で学校のほうへ歩いていった。
（……？）
公園の雰囲気がいつもと違う。
そんなにこの公園に来ることもないが、曜日によって子供が遊んでいたり、カップルがいたりと、この公園はその日ごとにいろんな雰囲気になっている。
いつもこの公園に来るたびに、俺はその雰囲気の違いを楽しんでいた。
（……けど）
そんな、いつもの公園で感じていた雰囲気とはまるで違う。
どういうところが違うのかはよく分からなかったが、俺は確かにこの公園がいつもと何か違うのを感じていた。
そんないつもと違う公園を学校に向かって俺は歩いていった。

いつもと違う様子の公園を歩いていると公園のシンボルの巨大樹の根元に人影が見えてきた。
普段なら気にも留めないけど、何故かそれに惹かれて俺の足は自然に止まっていた。
向こうがこちらに気がついたようにゆっくりと振り向いた
「――――っ」
そんな言葉しか出ない程その違いの元は異彩を放っていた。
見た感じは正直いえばかわいい少女という感じだ。やや短めのブロンドの髪に、整った顔だち、北欧系の白い肌が儚げな印象を与えてくる。
しかし、その服装は見たことがないものだった。
上下ともに、白と黒を基調としていて、ノースリーブの服と膝の

辺りまである大きめのスカートに見たことのない装飾が施されたファンタジーの世界に出てきそうな服だ。
（……けど）
「……」
一番不思議なのは、その表情だ。
少女の目には生気がまったく宿っておらず、自分を見ているのかどうかすらも定かではない。顔は向けても意識は向けてないかのようだった。
その顔からは感情は感じられず、ただ、そこに存在しているだけのような、そんな印象だった。
そんな不思議な少女を前に、心の中で面倒は避けたいという心と、少し話してみたいという好奇心がぶつかり合っていたが結局、好奇心が勝ってしまったので声をかけてみることにした。
「えっと……。あの、こんちは」
こういう時に語彙が貧弱な自分がいやになる。
「……」
しかし、帰ってきたのは無言だった。というより何も聞いてないように無反応だ。
この間は俺には耐え難い。
「……あの……聞こえてる？」
「……（コクリ）」
と、ゆっくりとした動作で肯定の意を示してきた。
口下手なのかな？　それとも、やっぱり俺の喋り方が悪かったのかな？
そういえば、知らない男に急に話しかけられたら、そりゃ警戒もするか。まずは自己紹介するのが妥当だよな。
「俺の名前は日比谷蓮。君は？」
自分で言っててなんだけど、まるで下手なナンパみたいだな。
さあ、どうくる。無反応か、それとも警戒されるか。
「……私に名はない」

「――――えっ？」
全く予想していない答えが返ってきて一瞬彼女が何を言っているのか理解できなかった。
（名前がない？　名前を名乗りたくないということかな）
やっぱり警戒しているのかなと思っていると、少女は言葉を続けてきた。
「名とは人が作り出した個体識別コード、それは私には必要ないもの」
妙な言い回しをする少女だと思いながら、話しかけたのを少し後悔してきた。
この子って、もしかしてあれなんだろうか。巷で言う電波系少女ってやつだろうか。
なんにせよ、
（面倒なことになった）
早くここを立ち去りたいが、今すぐこの場から逃げたら失礼だろう。
（こうなったら当たり障りのない話題で会話を終了にもっていこう。うん、そうしよう）
そう決めたら即実行。
「か、変わった服だなそれ。自分で作ったのか？
まずは服に関する話題で始めてみた。
「この服は、私がこの世界に生み出されたときから着ていたもの」
１つ目でもう挫けそうになってきた。
「……ど、どこから来たんだ？」
頼むから宇宙とか言わないでくれよな。
「私はこの世界からはまだ移動していないため、その質問には回答することができない。」
だ、大丈夫。俺はやればできる子だ。
「……り、両親が心配してるんじゃないかな？」
お願いします。一度でもまともな答えを返してください。

「私は主によってうみだされた。よって、両親なるものは私には存在しない」
耐えろ！　耐えるんだ、俺の精神力！
「……よくみたら、君ってかわいいね」
もう、ほとんどヤケクソだった
「私の使命に、その要素は必要ない」
「もう無理だあぁーーーー」
精神的耐久値が０になった俺は全速力でその場から逃げ出した。

「ぜぇぜぇ……。何なんだ、あの、電波少女。俺の精神力じゃ、あの会話について行くことも、あれ以上あの場にいるのも無理だったぞ……」
ああいうのに関わったら、ろくでもない未来に直行だ。
（……けど）
落ち着いて、さっきの光景を思い出してみる。言ってることは意味不明だし、服装もちょっと・・・いや、かなり変わっていたんだけど――――
「結構可愛かったな」
……。
「って、何今そこで会って少し話した（ちゃんとした会話になっていたかは微妙だけど）だけの少女の顔を思い浮かべて『可愛かったな』なんて呟いてるんだよ、俺は！　それじゃまるで植朔じゃねえか！」
そうやって自分に突っ込みながら、時計を見てみると、結構な時間になっていた。
「っと、今は、こんなことしてる場合じゃなかった。早くノート取りに行かねえと」
全力疾走後なので、少しゆっくりと校舎の中へ入っていった。
「ふー。早くやっちまわねえとな。」
ノートを取って廊下を歩いていると、いろんな音が耳に入ってく

る。機械が動く音、部活の掛け声、廊下を歩く足音。そして俺を呼ぶ声――――

「おーい、蓮ちゃーん」

さて、さっさと帰って、この課題を早く終わらせよう。

「……？　蓮ちゃんってば、おーい」

あの子と話してて、時間食っちまったからな。近道なんてするんじゃなかったな。

「聞こえてないのかな？　おーい、蓮ちゃんってばー」

課題、今日中に終わるかな。かなり大量にあるし。

「蓮ちゃんっ。蓮ちゃん蓮ちゃん蓮ちゃん蓮ちゃん蓮ちゃん蓮ちゃ――――」

「だあっ！　その呼び名を連呼するな！」

「あっ、やっと気付いてくれた。私、何回も蓮ちゃんのこと呼んだんだよ」

「知ってるよ！　一言一句全部聞いてたよ！」

俺のことを『ちゃん』付けで呼ぶこの女子は日比谷晶（ひびやあきら）。苗字からも分かるとおり俺の従姉だ。

小さい頃から一緒なのだが、困った事に子供の頃の『ちゃん』付けの呼び名を今でも使うから恥ずかしいことこの上ない。

「聞こえてたなら何で返事してくれなかったの？　蓮ちゃん」

「『ちゃん』付けで呼ぶからだよ！　っていうか何でいつまでも『ちゃん』付けなんだよ！」

「？　蓮ちゃんは蓮ちゃんだよ？」

何を当たり前のことをといった様子で首を傾げてやがる。この従姉は・・・・。

「とにかく！　『ちゃん』付けは止めろ。いいな？」

「え～～」

「い・い・な？」

「は～い」

「よし。……ところでこんな所で何やってんだ？　まさか居残りか

？」
「ちっ、違うよっ！　生徒会の仕事で残ってたんだよ。そういう蓮ちゃ・・蓮くんはどうしてここに？」
言い忘れていたけど、晶はこの学園の生徒会長だったりする。
「っと、こんなことしてる場合じゃなかった。課題やらないといけないから帰るわ」
「そうなんだ。引き止めてごめんね。それじゃ、私もいくね」
そう言って晶が去っていった。
さて、俺も帰るか。
「じゃーねー。蓮ちゃ～ん」
「……」
……もういいや。
外はもう既に、かなり暗くなっている。ぐずぐずしていないで、早く帰って、課題をやろう。
学校を出て見上げてみると、公園の巨大樹が目に入った。すると自然とあの名も知らぬ少女の姿が浮かんでくる。
おかしな服装、おかしな言動、生気の感じられない表情、そして、整った顔。あのまま逃げてしまったが、今頃どうしてるんだろうか。
別れも言わずに、いきなり逃げてきたので、少し気にはしている。
しかし、もう一度会って、あの気まずい空気になった上に、電波話まで聞かされるのは俺の精神が持たないので、遠慮願いたい。
さっき話してから結構な時間が過ぎていたのでもうあの公園にいることはないと思うが、なんとなく、また、あの公園を通るのは躊躇われた。
「『急がば回れ』だな・・・」
そう呟きながら、俺はいつもの道を通って家路についた。

名無しの少女（後書き）

最後まで読んでくださったのなら誤字脱字や悪い点など、どんどん指摘してください。

再開

「ちーす、って、どした蓮！？　魂が抜けたみたいになってるじゃねえか」
「……古文って難しいな……」
次の日。
もう俺は心身ともに燃え尽きていた。
「そんなに燃え尽きるほど、課題がキツかったのかい？」
そんな燃え尽きていた俺に、クラスの秀才こと東雲は話しかけてきた。
「……おう……」
しかし、今の俺には、そう力ない返事しかできない。
「君は本当に、得意科目と不得意科目の差が激しいな。理系の成績は僕よりも良いのに」
東雲は、呆れたような顔でそんなことを言う。
東雲の言うとおり、俺の成績は総合的にいうと、中の上といったところだ。
そして、東雲の言うとおり理系の教科は学内でも一、二を争うほど良い。東雲よりも良い……けど、その代わり、文系の教科は学内で一、二を争うほど悪い。一弥よりも悪い。
その苦手教科の課題はなかなか進まず、結局、徹夜する羽目になってしまった。
「そうだぜ。量は多かったけど、俺でもそこまでかからなかったぜ？。まあ、そもそも、両が多いから、早めに宿題を出されるんだから、課題を忘れて徹夜で終わらせるはめになった蓮のほうが悪いかな」
「……う、うるせー……」
分かってるけど、一弥にそう言われると、なんだかムカつくぞ。
そうやって二人と駄弁っていると――

「おはよー。蓮ちゃんいる～？」
晶が間延びした声と共に、教室に入ってきた。
そして、クラスの中の俺の姿を見つけるとうれしそうな顔で近寄ってきた。
と、いうか、
「……『ちゃん』を付けるな……」
他クラスに来てまで『ちゃん』を付けるか……。
クラスの皆はもういつもの事ということで、特に驚いたりすることはないが、それでも人前で『ちゃん』を付けられて名を呼ばれては恥ずかしいことこの上ない。
「あれ、蓮ちゃん元気ないよ。どうかしたの？」
なのに、お構いなしか、この野郎……。
けど、肉体的にも、精神的にも疲労しきっていた今の状態では、これ以上言う気になれない。
出来ればこのままお帰りいただきたい。
しかし、ここで俺が弱っているような言動をすれば、あの従姉はこれ以上ない位、俺の世話を焼くだろう。
思い出したくもない。
ぐちゃぐちゃになったおかゆを食べさせられたり、ベッドに縛り付けられたり、子守唄を延々と歌われて俺が寝なかったら無理やり気絶させられたこともあったっけ……。
本人は介抱しているつもりなのだろうが、俺にとっては、さらなる疲労の元になる。
なので、ここは誤魔化しておくことにしよう。
「……別に。なんでもない……」
「そっか。よかった～」
……。
簡単に済んでいいんだけど……いいんだけど……。
それでいいのか、晶よ……。
いくらなんでも簡単に信じすぎだろう……。

俺はお前の将来が少し心配になってきたぞ。
だが、面倒な事態を避けることには成功したので、そのまま話を続けることにしよう。
「……で、今日は何の用だ？」
晶が教室に来るのは、あまり珍しいことじゃない。
教室が隣なので特に用がなくてもちょくちょくこのクラスにやってくる。
「あ、そーだった。蓮ちゃん今日、時間ある？」
ん？　今日は何か用事があるのか。
「バイトだよ」
今日の俺のコンディションは最悪だが、バイトに行かないと、今月の生活がやばい。まあ、コンディションが悪いのは、課題をやってなかった俺が悪いんだが。
「じゃあ、バイトの後でいいから、私の買い物に付き合ってくれないかな？」
「嫌だ」
即答してやった。
ただでさえ今日は疲労しきったうえでバイトなのに、その上買い物に付き合うのは正直無理だ。
「え～。私ひとりじゃ荷物が重いんだよ～（ガクガク）」
そう言いながら、俺の体を揺さぶる晶。の、脳が揺れる～。
「ほ、本当に……き、今日は……む、無理だって」
体を揺さぶられながら、俺がなんとかそう言うと、晶は俺の体を揺さぶるのを止めた。
どうしたのかと思い、晶の顔を見てみると、
「私と買い物に行くの嫌？」
そう言いながら、晶は俺の顔を覗いてきた。その顔は少し悲しそうで、目に涙が溜まっている。
そ、そんな顔されると罪悪感が……何も悪いことしてないのに。
「「「……」」」

ぐっ、周りの視線が痛い。女子の中には「かわいそー」とひそひそ話す声が聞こえてきた。丸聞こえだよ、こんちくしょう。
こんな状況になって、これ以上断り切れるはずもなく、
「だーもう！　わかったよ、バイト終わったら付き合うよ」
こうやって、承諾するしかないわけだ。とほほ……。
「本当？　約束してくれる？」
「ああ、約束する」
「本当！？　やったー」
眩しいくらいの笑顔で喜んでやがる。やれやれ…。
「じゃあ、バイトが終わる時間になったら行くね。じゃあ、また放課後～♪」
これ以上ないくらい上機嫌で晶は教室から出て行った。まったく、何がそんなにうれしいのやら。
晶が出て行った後、教室に喧騒が戻って、一弥と東雲が集まってきた。
一弥は笑顔でこぶしを作って、
「なあ、蓮。殴っていいか？」
と言ってきた。
笑顔が少し怖いぞ一弥。
「はあ？　なんでお前に殴られなきゃなんねえんだよ」
別に殴られるようなことをした覚えはないぞ。
晶を泣かせそうになったのは非難されそうだけど、最後にはなんでかは分からないけど上機嫌になってたからそこまでされる言われはない
「はは、知らぬは本人ばかりだね」
東雲は苦笑いしながらよくわからないことを言っていた。
「むき～。この鈍感バカめ！　世界のモテない男を代表して天誅だこのやろー」
「うわっ！　ほんとに殴るなよ。おい東雲、このバカ止めてくれ～」
こんなやり取りで、朝の時間は過ぎて行った。

徹夜明けで、朝からこんなに暴れて、授業が午後まであり、バイトの後で、晶の買い物に付き合って。
放課後……。体力持つかな……。

「……死ぬ……」
現在、俺の手には食材がパンパンに詰まった袋や、どこかのメーカーの服が入った紙袋がぶら下がり、靴や皿など、他にもたくさんの種類の箱がうず高く積まれている。
その俺の前で、晶はまた何かを買っていた。
退屈な授業を必死に乗り切り、バイトを気力で乗り切っていると、約束通り、終わりごろの時間に晶はやってきた。
「はい、これもお願いね♪」
「……」
そして、その後、商店街の店でこのように次から次へと買い物をしては俺に持たせてきた。
ちなみに、晶は、普段あまり買い物はせず、必要なものが出たときに、いろいろ買い溜めをするので、一回一回の買い物の量が多い。
なので、普段でさえ、晶の買い物に付き合うのはすごくキツイ。
しかも、昨日から精神的にも肉体的にも疲労の極みにあった俺の体は、現在悲鳴を上げている。
「えっと、次は～」
「まだ回るのかよ！」
「うん♪」
上機嫌で答える晶。
けど、さすがに、もうこれ以上は限界だ。
「頼む、少し休ませてくれ」
「え～」
「頼む」
俺は必死の顔でお願いした。
「もう、しょうがないな～」

そう言って、きょろきょろと辺りを見回してる———多分、休めそうな場所を探しているのだろう。
た、助かった……。もうこれ以上は歩けん……。
「じゃあ、あの公園で休みましょう」
といって、晶が指差すほうを荷物に気を付けながら見てみると、そこは、昨日近道をしようとして、よくわからない（自称）名無しの少女と会った公園だった。
俺と晶はその公園に入り、手近なベンチに座った。
「あー—、疲れた」
「お疲れ様。まだあるんだけどね」
「……」
まだあるのか……。
まあ、それでも、今のうちに少しでも休んでおこう。もう足がパンパンだ。
「今日は付き合ってくれてありがとうね」
「約束したからな」
「うん、蓮ちゃんはいつもちゃんと約束を守ってくれるもんね」
「それに、なんだかんだで普段から晶には世話になってるしな」
「それってやっぱり恩返し？」
「ああ」
「そっか」
俺にとって、恩返しと約束はとても大切なことだ。
だから今まで、交わした約束は絶対に守ってたし、恩は受けたら必ず返していた。
「いつもありがとうね」
「何をいまさら。晶の買い物には、今まで何回も付き合っただろ」
その度に、大変な思いはしたけどな。
「それでも♪」
うれしそうにそう言う。
晶の中では必要な言葉だったらしい。

「そっか」
「うん♪」
にっこりと笑ってそう答えた。
……まあ、何回も見ているけど、この顔は何回見てもいい。
口には絶対出さないけど。
そんなこんなで、他愛ない話をしていると、突然音楽――――晶の携帯の着メロだ――――が鳴り出した。晶は慌てて携帯を取り出した。
「はい、あっ、芽衣ちゃん……うん……あ……ご、ごめんね、忘れてた。……うん、行きたいのは山々なんだけど……」
晶はチラッと傍にいる俺を見た。
「ああ、いいよ。晶の家に置いとくよ。叔父さんと叔母さんはいるんだろ？」
「うん、ごめんね、蓮ちゃん」
そう言って晶は公園の外へ走って行った。
残された俺は、もう少しゆっくりすることにした。
そうやってゆっくりしていると、ふと昨日会った少女のことを思い出した。
「そういえば、あの子に会ったの、この公園だったっけ」
そう呟いて、巨大樹のあるほうを見る。
そして、晶の荷物を見る。
この辺は夜の人通りは少なく物を取られる心配も少ない。
「まあ、少しくらい大丈夫だろ」
そう呟いて、俺は少女と会った場所へ足を向けた。

――――――いた。
見間違うはずのないファンタジーな服装、短めのブロンドの髪、きめ細かな白い肌、整った顔立ち、そして、生気のない表情。
昨日会ったあの名無しの少女だ。
昨日と同じく感情のないその目で俺に視線を向けている。

普通はこんな時間にこんな場所に女の子が一人でいるのは驚くべきことなんだけど、俺は何となくここにいる気がしていたので、驚きはあまりなかった。
昨日で懲りたはずなのに何故か、また俺はその少女に話しかけていた。
「よっ、また会ったな」
「……」
予想はしてたけど、この子本当に無口だな……。
「昨日もそうだったけど、女の子が一人こんな所で何やってんだ？」
「……この世界を見ていた」
うっ、またこの電波発言か……やっぱり付いていけん。
でも、この子質問にはちゃんと答えてくれるみたいだな。コミュニケーションが成立しないわけじゃなさそうだ。
「まあ、人の事に口出しするつもりはねえけど、女の子が一人でこんな遅い時間にいたら危ねえから早めに帰れよ」
「……」
こうも無言で返されると、この子がちゃんと話を聞いてくれてるのかどうか疑わしくなるな。
俺が心の中でそう考えていると、
「……帰れ……何処へ？」
少女が突然言ってきた。
お、初めて質問の答え以外でしゃべってくれたな。
しかし、帰れと言われて何処へって聞くか？　普通。
「そりゃあ、家にだよ」
「……」
しかし、少女は何も反応しない。
けど、本当になんでこんな所にいるんだろう。
格好と言動だけですでにおかしいんだけど、普通、女の子が一人でこんな時間にこんなところにいたら両親が心配するだろう。そこは俺が口出しすることでもないかな？

「まっ、まだ家に帰りたくないんならここにいればいいしけど本当に早く帰れよな。この辺この時間は人通りが少ないんだから」
最後にそう注意してたちあがった。
そろそろ戻らないと荷物が心配だし、晶が連絡を入れてるだろうから叔父さんと叔母さんも俺を心配するだろう。
「……」
そんな俺を少女はやはり無言で見送る。
「じゃあな」
そう挨拶して、俺は晶の荷物が置いてあるベンチまで戻っていった。

「あ～重かった」
少女と別れた後、あの大量の荷物を晶の家に届けて自分の家に帰ってきた。
腹が減っていたが、重い荷物を運んで汗もかいていたので風呂にも入りたかった。どちらにしようか迷いながら靴を脱いで家にあがる。
（おっと、鍵ちゃんとかけないと）
そう思って後ろを振り向くと———

「……」

———さっき別れたばかりの少女が佇んでいた。

……。
あまりに突然のことで思考が止まった。
何でこいつがここにいる？
俺は確か公園でこいつと別れた後晶の荷物を家に届けて自分の家に帰って飯にしようか風呂にしようか迷って鍵を閉めるのを忘れて後ろを向いたらこいつがいて……ああーーわけわかんねー！

「お……おま……。何でここに……」
俺がそう尋ねると少女は
「……あなたが帰れ言ったから」
「えっ！？」
そう言われて俺はさっき公園でやったやり取りを思い出す。

『早めに帰れよ』
『……帰れ……何処へ？』
『そりゃあ、家だよ』

「……」
俺の体中が冷や汗をかいているのが分かる。
確かに俺は家に帰れと言ったけど『誰の』家とは言っていない。けど、なんで『帰れ』と言われて人の家に返ってくるんだ。この子には日本語の常識と言うものがないのか。国語が最低な俺があまりいえたものじゃないけど。
できれば出て行ってほしいけど、今の時刻は十一時で外はもう完全に暗くなっている。
それに、やっぱり普通なら『帰れ』と言われて人の家に来る人間はいない。この子には何か事情があるんだろう。それなら無理に追い出すことも出来ない。
……少しくらいならいいか。
「……仕方ねえ、まあ上がれよ」
「……」
やっぱりというか、少女は無言のまま上がろうとしている。
「ちょっと待て。人の家に上がるときは『お邪魔します』を言うもんだろ」
そう俺が注意すると少女は数秒の無言の後、
「お邪魔します」
といって上がってきた。うんうん、礼儀は大切だよな。

しかし、少女は上がってきて俺の前に来ると全く微動だにせず立ったままの状態でとまってしまった。
「あー、その辺に座っててくれ。」
と俺がそう言うとその場にちょこんと座った。小さく座るその姿は少しかわいく感じた。
「……」
しかし座っても無言のままだったので、何か話そうと思うと、急にまぶたが重くなってきた。
今日は朝から体を酷使しっぱなしだったからもう限界のようだ。
（飯と風呂はもういいや。）
この睡魔に抗うのは無理そうだ。
「俺は、もう寝るからお前も寝ろよ」
と無言のままの少女に言いながら寝る支度を始めた。
「……」
俺の言ってることをちゃんと聞いているのか疑問に思ったけど、今は一刻も早く眠りたかったので歯を磨いて布団を二つ敷いて寝る準備を整えた。
「じゃ、おやすみ～」
と言って目を閉じた。
一瞬この先どうしようとか、自分の部屋に女の子がいるのって晶以外じゃ初めてじゃね、とか俺の横で女の子が寝るのかとか色々考えたけど疲労した体は睡魔にすぐに負け、意識は闇に落ちていった。

◆

蓮が寝ても少女は眠ろうとしない。
じっとその場に座っている。
まるで置物のように微動だにしない。
置物のように微動だにしないまま、口だけを動かして何かを呟く。
「現状確認。現在時刻、この世界で午前一時。現在位置、観測場所

で遭遇したこの世界の人間の住居。二度目の遭遇でここへ連れてこられた。目的は不明。しかし、この人間は私への悪意はない模様。よって、使命に支障はないものと判断し、適宜行動するものとする。以上で現状の確認を終了する」

少女の言葉は誰にも聞かれることなく闇へと消えていった。

少女は口を閉じるとまた微動だにしなくなった。

周りにあるのは完全な闇。

その中で少女はただ座って自分がついて来た少年をみていた。

歪み

意識が浮上してきた。そろそろ朝みたいだ。俺の体内時計はけっこう正確で、いつも目覚ましなしでおきている。なんて便利な体だ。

目を開けるといつも通り部屋の天井――――

「……」

「おわっ！？」

じゃなくて、無表情&無言で俺の顔をジ――――っと見下ろしている見慣れない少女の顔が目に入ってきた。

一瞬何がなんだか分かれなかったけど脳に血が回ってくると段々状況が理解出来てきた。

そういえば、昨日なんだかんだあって女の子泊めたんだった。

「おはよう」

「……」

「朝は『おはよう』って言うんだぞ」

「……おはよう」

この子、挨拶も言われないと出来ないのか。この子に世の中、というより人としての常識があるのか疑わしくなるな。

あと、よく見てみると少女は昨日俺が寝たときと全く同じ姿勢のままのような気がする。一度寝て起きたにしては昨日と違いがなさ過ぎる。

「お前、もしかして寝てないのか？」

「……（コクリ）」

「眠れなかったのか？」

「……？」

何を言っているのか分からないという風に首を傾げた。この子と話すのはやっぱり疲れる…。

グゥ～

と、そこで俺腹の虫が鳴った。

「っとと。朝飯朝飯」
昨日の疲れが少し残ってたので今日は簡単にトーストとスクランブルエッグで済ませる事にした。
「いただきまーす」
「……」
「飯のときは『いただきます』だ」
「……いただきます」
その一言で朝飯を食べ始める。
朝飯を食べていると、ふと少女が全く飯に手を付けていないことに気がついた。
「どした？　食欲ないか？」
「……（フルフル）」
違うみたいだ。
少女の目を見てみると、いつも何処を向いてるかよく分からない目線が俺の手元に向いている事に気付いた。
まさかとは思うけど、
「箸の使い方、分からない？」
「……（コクリ）」
見た目は日本人には見えないと思っていたけど、やっぱりこの子外国人なのかな。
「箸はこうやって使うんだ」
俺が少女の前で箸を動かすと、少女はゆっくりと箸を取ると、
「……」
ひょい、パク。ひょい、パク。
スクランブルエッグを一つ一つ日本人顔負けの器用さで見事に食べ始めた。
器用なんだな、と思いながら眺めていると、学校に行く時間が迫っていたので俺は急いで飯を食べきった。
「それじゃ、学校言ってくる。飯食い終わったら好きにしてていいからな」

そう言い残して俺は家を出た。
あの子を家に一人で残すのには、いちまつの不安があるけど、今は仕方がない。
そう思いながら俺は、学校へ向かっていった。

「蓮ちゃん、おはよ～」
今日も晶が恥ずかしい呼び名を呼びながら教室にやってきた。
「ちょうどよかった。晶、ちょっといいか」
いつもなら抗議するけど、今日は少し用があるのでなしだ。
「あれ？　今日は『ちゃん』を付けるなって言わないんだね」
「分かってるなら、なんでいつもいつもその呼び名で呼ぶんだ！？」
いつものように、俺の精神力を削ってくれる従姉だった。
「それより、今日の放課後晶の家に行っても――――」
「いいよ」
「早っ！？　まあいいやよろしく」
「うん。それじゃ～ね～」
そう言って、わが従姉は自分の教室へ帰っていった。……結局、何しにきたんだ？

「おまたせ～」
「いや、今来たところだ」
放課後、約束どおり晶の家に行くために待ち合わせした。
「いや～。男が言ってみたい台詞ベスト三に入るその言葉を言う奴がこんな近くにいるとはな～」
「そのランキングが一体どういう基準なのかが疑問だね」
「俺は、なぜ当たり前のようにお前ら二人がいるのかという方が疑問なんだが」
いつもは三人で帰ってるけど、今日は晶の家に行くから無理だといっておいたのだが。
「いやな、お前がいないと暇だから少しの間だけでも話し相手にな

ってもらおうと思ってな。」
「僕も大体同じだよ」
「おまえら、他にやることないのかよ」
呆れたように二人にそう言うと、
「仲良しで良いことだね」
と、晶が笑顔で言っていた。……確かにそうだけどな。
「それはそうと、今日は何の用事なの？」
と、聞いてきた。そういえば、用事を言ってなかったな。
「ああ、ちょっと晶の服を貸してほしいんだ。」
「「「……」」」
あれ？　何で皆そんなに驚いてるんだ？
「……蓮、そっちにいっちまったか」
植朔がかわいそうなものを見る目でそう言った。そっち？　そっちってどっちだ？
「まあ、世の中にはたくさんの人がいるからね。中には特殊な趣味を持つ人だっているさ」
東雲が残念そうにそう言った。特殊？　夢のこと意外俺はごく普通の高校生だけど。
「……蓮ちゃん」
晶が泣きそうな顔で俺の顔を見てる。俺、何かしたか？
「別に、蓮ちゃんに女装の気があったとしても私は気にしないよ」
「違う！！」
なんて勘違いをしてるんだ、この三人は！　何とか弁解しないと。
「別に俺は女装がしたいわけじゃない。実は――――」
ちょっと待て。見知らぬ女の子を家に連れ込み（付いて来たんだけど）同じ部屋で一夜を明かした。その事実この三人に教えるとどうなる。少なくともさらに面倒になるだけだろう。
「「「実は？」」」
考えろ。考えるんだ。この場をうまく切り抜ける嘘を。
「実は近所におませな子が居てな。その子が年上が着る服を着たい

って言ってたんだ」
く、苦しい……。三人の反応は、
「「ああ、なるほど」」
植朔と晶はなるほどという表情で納得していた。……バカで助かった。
東雲は薄い微笑を浮かべていた。たぶんあいつは最初から、からかってただけなんだろう。
とにかくこの場はうまく切り抜けたみたいだ。

「ただいまー」
「……」
俺を無言で迎えた少女は朝家を出たときと同じように座っていた。朝食はなくなっていたので、ちゃんと全部食べてくれたみたいだ。
「こういう時は『お帰りなさい』だぞ」
「……お帰りなさい」
抑揚のない声でもちゃんと答えてくれた。
「よし。それはそうと、これ見てくれ」
そう言って俺は晶に借りたものを見せた。
「一緒に外行こうと思ったんだけど、その服じゃ目立つからな。これに着替えて外に行こうぜ」
多少強引な気もするけど、この子には常識や感情といったものが欠落している。外に出て色々見て回れば少しはそういったものを身に付けてくれるだろう。おせっかいかもしれないけど……。
そんなことを思っていると、目の前で信じられないことが起こっていた。
俺の目の前で少女が服を脱ぎ始めた。
「ななっ……！？」
俺はあわてて後ろを振り向いた。
肩の辺りまで素肌が見えたけど胸とかの大事なところは見ていないから大丈夫だ。……何が大丈夫か分からないけど。

それにしても、常識とかが欠けていると思っていたけれど、羞恥心までかけているとは思わなかった。……このまま少女をこの家に置き続けると、精神がやばい事になりそうな気がする。
「着替え終わったか？」
「……着替え終わった」
その言葉で振り返ると俺は息を呑んだ。
晶に借りた服は飾り気のない真っ白なワンピースだった。
少女は元々顔は整っているし、肌もきめ細かくて真っ白だ。そんな少女が飾り気のない真っ白なワンピースを着た姿は正に神秘的の一言だった。
「……」
少女の視線で我に帰ると、
「さっ、行こうぜ」
少女の手をとって家を出た。

「……」
「……」
……困った。外に出て来たはいいけど、その後どこに行くか決めてなかった。
家を出たときの勢いは何処へやらで、俺は少女を連れて当てもなく商店街をぶらついた。
当てもなく歩いても、面白くない。この子が楽しいと思うところに行かないと、そう思っていると注意力が散漫になって少女へ注意をちゃんと向けれなかった。誰かにぶつかったみたいだ。
「っ痛ぇ……。おい、ぶつかっといて謝罪もなしかよ」
運悪く、少女がぶつかったのは柄の悪そうな男の3人組みだった。少女は無言だった。もしかしら、こういうときに誤るという常識もないのかもしれない。
そんな少女の様子に三人の男たちは気分を悪くしたらしく、目を吊り上げて少女に詰め寄って言った。

面倒な事になりそうだ……。
　さて、、こういう風にチンピラとかに絡まれてしまった時には面倒ごとを最小限で回避するやり方と言うのがある。（最小限と言ったのは、チンピラに絡まれてしまった時点で既にある程度面倒な事になっているからだ）。
　まず第一にすぐに誤ること。こちらが不遜な態度をとっていると、収まるものも収まらない。相手がどんなに嫌な奴でも我慢して笑顔を浮かべるのがポイントだ。
「すいません、こいつ口下手で」
「ああっ？　誰だてめえ。てめえに用はねえよ。用があるのはそっちの女だ、引っ込んでろよ」
　…我慢だ。
　一度誤っただけでは、相手にちゃんと届かないことも多い。
「ほんとすいません。こいつ、マジで話すの苦手なんです」
「てめえに用はねえって言ってるだろうが」
……我慢だ。
「よく見るとその子かわいくね？　なあ、ぶつかったこと水に流すからさ、そんな奴ほっといてこっちに来いよ」
　男のひとりが少女に手を伸ばした。少女の顔には何の感情も浮かんでいない。手を掴まれても多分されるがままだろう。
　次に、言葉だけで相手が許してくれなかったときは……実力行使だ！
男の手が少女の手に触れる瞬間、俺はとっさに男の手を掴み、合気道の要領で捻りあげた。
「「「なっ！？」」」
　男は三人とも驚いた顔でこちらを見てきた。
　晶と一緒にいると何故かガラの悪い奴に絡まれることが多かった。そこで自分が弱いと、色々と面倒な事態になることが多かったので柔道と合気道を習った。週６の稽古は正直面倒だった。植朔に面倒な稽古を続ける理由を話したとき「おまえアホだろ」といわれた。

面倒な事態になるのが面倒で、とても面倒な稽古をして何が悪い。
「何すんだてめえ！」
「やんのかこら！」
他の二人が殴りかかろうとしてきた。
相手が複数のときは、一人を止めてもほかの奴が襲い掛かってくることもある。そんなときは……見せしめだ！
俺は手に掴んでいた男の手をさらにひねり上げた。
「い、いでででで」
苦痛の声で他の二人がひるんだ。
「本当、喧嘩する気はないんですよ。穏便に済ませましょうよ、穏便に」
そう言いながら手にさらに力を入れた。
手をひねられてる男の顔が、かわいそうなぐらいに歪んだ。
他の男たちが「くそっ」と言って逃げてしまったので残った男の手をはなしてやった。
「おぼえてろよ！」
と、今時テレビの悪役でも言いそうにない台詞を残して逃げて言った。
「ふぅ～。そこまで面倒な事にならずに済んだな」
そう言いながら少女の様子を伺ってみると何もなかったかのように佇んでいた。
俺は苦笑しながら少女の手を取って歩き出した。

あの後さらに歩き続けてたまたま目に入った喫茶店に入った。
しばらくして注文したプリンがやってきた。プルプルしておいしそうだ。
「……いただきます」
朝に言ったことをしっかりと覚えてくれていたようで、少女はちゃんと『いただきます』と言った。俺も「いただきます」と言って食べ始めた。

「どうだ？　そのプリン」
少女が何も言わなかったので、女の子なら甘いものを食べればご機嫌になるだろうと思って無難なものを選んだつもりだけど、どんな反応するかな。
「……ビタミン2、ビタミン12、カルシウム、レチノール、パントテン酸、リン、脂質、たんぱく質、その他微量」
その返しは予想外だ。
そして、なんで食べただけでそんなことまで分かるんだ？
「いや……栄養素じゃなくてな……」
「……卵、卵黄、グラニュー糖、牛乳、バニラエッセンス、砂糖」
「分量は……！？」
いや、そんな問題じゃないだろう俺……！
「そうじゃなくって。うまいかどうかって聞いてんだよ」
「……なかなか」
おお……。
どうせそっけない返事が来るものだとばかり思っていたので、少し驚いた。
よく考えたらこういう普通の反応をこの子がしてくれたのは初めてかもしれない。
なぜかは分からないけど、なんとなくうれしく感じてる自分がここにいた。
ささやかな満足感を胸に抱きながら俺は自分のプリンを平らげていった。

（さて、どうするかな……）
甘い物作戦は思っていた以上にうまくいったけれども、その後はやはりノープランだ。また当てもなくぶらぶらしてたら、さっきみたいに面倒な事になるかもしれない。かといって、正直もう俺には他に女の子が喜ぶような場所を知らない。植朔あたりなら30以上はそんな場所を知ってるだろうが……。

もうそろそろ帰ろうかなと思っていると少女が急に立ち止まった。
何事かと思って後ろを振り返ってみると少女は少女と初めて会った公園を見ていた。
「公園に入りたいのか？」
「……」
少女は何の反応も返さない。さっきの喫茶店での反応も初めてだったけど、こっちが質問しても何の反応も返してこないのも初めての反応だ。
よく分からないけど、別に早く帰ってもすることがあるわけでもないので別に公園に寄る位ならいいだろう。
「ちょっと寄ってくか」
仕方ないように言って歩いていく俺に少女はやはり無言で付いてきた。ただ、なんとなくそのときの少女の様子に違和感をおぼえた。
二人で公園を歩く。周りに人気はない。最近人がいないことが多いな。
そんなことを考えながら、無駄と知りつつも、少女に話しかける。
「それにしてもお前、何者なんだよ」
「……」
「なんか常識とかもかけてるみたいだしよ」
「……」
「もしかして、いいとこのお嬢様だったり？」
「……」
なんと言っても少女は答えない。俺だけが話している。最初は逃げちまったけど、何度も話してると慣れてくるもんだな。何だかんだでまだ数回しか話してないけど。
それにしても、やっぱり2日前に初めて会ったのにこの子を知ってる気がするんだよな。既視感みたいにどこかで見たことがあると言うよりは、この子を知っているっていう感じだったし。
俺の脳を何度検索してもやっぱりこの子と会ったという記憶はない。というか、1度会ったら忘れられないだろう。

そう考えながら少女の顔を凝視しても少女はそ知らぬ顔で、顔を俺のほうに向けている。
これが少女の普通なんだろうと思って深く考えないようにしていたけれど、今の少女はどこか様子がおかしい。
何処がと言われると困るけど、どこか違う。
現在の少女も、こちらを向いているけど俺のほうを見ているのかよく分からない目をしている。けれど、今の少女はこちらを見ていないと言うよりは、何か他のものに注意を向けているという感じなのだ。
面倒だったけど結構本格的に武道を習ってきた俺は、そういう気配とか意識と言ったものがなんとなく分かる。
少女が何に意識を向けているのかと思って辺りを見回しても何もいない。
理由はよく分からないけど、このままここに居たら面倒な事になる気がした。
錯覚かもしれないけど、とりあえず、早めに帰ったほうがよさそうだ。
「もういいだろ。そろそろ――――」
「……来た」
「えっ？」
なにが？　と聞くことは出来なかった。少女の目線の先にあるものに言葉を失っていたから。
そこには、目視できるものは何もないが、明らかにおかしい。
景色の一部が歪んでいっている。
というより、空間が歪んでいる。
ゆがみが段々大きくなって何かの形を成してきた。
そのゆがみが形を成した何かは姿（？）は見えず、まるで不完全な透明化のようだった。形は分かりにくいが、体長が5メートルはある蜘蛛のように見えた。
世の中には擬態して敵の目を欺く生物もいる。だから、透明（の

ように見える）のは百歩譲ろう。
けど、体長5メートルの蜘蛛はありえない。世界には知られていない生物がたくさんいる。けど、こんな奴が見つかっていないわけがない。
人間は自分の理解を超えた事態にあうと、何も出来なくなると言う。
けど俺はそんなことにはならずこの目の前の生物（？）を見つめて観察していた。
ちなみに、今の俺の心の中は警戒心七割、好奇心三割ぐらいだ。
正直こいつが何なのか知りたくてうずうずしている自分もいる。なまじ理系が得意なだけに、この手のものが現れると興味を惹かれてしまう。
さて……。そうやって観察していると、この生物に動きがあった。前足を上げて……俺と少女に狙いを定め……一気に振り下ろしてきた。
「敵意むき出しじゃねえか！」
言葉が通じるか分からない相手に叫びながら、俺は少女の手をとって間一髪で避けた。
さっきまで自分たちがいたところを見てみると、地面が大きくえぐれている。
……やばい。
これってもしかしなくても命の危機って奴じゃないか。あんなの食らったら一撃で即死だ。
これは逃げるしかない。
俺は少女の手をとって、
「こっちだ！」
ひとまず一目散に走った。
走りながら後ろを確かめてみると、
「げ……！？」
そいつは結構な速さで俺たちを追ってきていた。このままだと追

いつかれる。
ヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイ！
マジで冗談抜きで死ぬかもしんない。
少女の顔を見てみた。
こんなときでも、その表情には何の変化もない。
「くそっ」
全速力で走った。
けど、相手のほうが早い。すぐに距離をつめられてきた。
もう一度後ろを確認してみた。
すると、そいつはもう既に俺たちのすぐ後ろにいて。
前足を俺たちに振り下ろそうとしていた。
（……終わったな）
もう避けられないだろうな。
死ぬのってどんな感じだろ。
痛いのは嫌だな。
１７年っていうのは世間の平均と比べたらやっぱり短いんだろうな。
そういえば、この子もいたんだっけ。
この位置だと、この子も死んでしまうだろう。
結局子のこのことよく分からなかったな。
そう考えている内に。
前足が俺たちを貫こうとして――
ドン！
――横にそれた。
……なんだ？　何が起こった？　銃声？
「そうだ。あの子は……」
一瞬心配したけど、すぐ傍にやっぱり無表情でたたずんでいた。
よかった、無事みたいだ。

そんな心配していると少しはなれたところに人がたっているのが見えた。
その人は俺とそう変わらないぐらいの歳の少女だった。服装は白を基調としていてタイトなスカートを履き、上から地面まで届きそうなコートの上半身の部分だけボタンを留めてを着ている。こっちの無口少女（ややこしいからそう呼ぶ事にしよう）とはまた違ったブロンドの髪は腰まで届いており手には二丁の拳銃を持っている。
生物がその双銃少女（二丁拳銃が印象的だから）の姿を見つけるとそちらのほうへ突進していった。
「危ない！」
と俺が言う前に、双銃少女はジャンプで俺のすぐ前まで飛んで避けてみせた。
ちなみに、彼女がいた場所からここまで15メートルある。彼女はそれを助走なしで一気に跳んできた。それだけで人間技じゃない。
……漫画みたいだ。
でも、これは現実だ。さっき本当に命を落としかけて助けられたというのも幻想とかじゃない。
とりあえずは、この双銃少女を頼ってここを乗り切るしかない。すべては後だ。
しかし、
「これは……こんな姿の《歪み（ディスト）》なんて聞いたことない」
こっちはこっちで、驚きの表情で俺には理解できないことを口走っている。
それに、よく見ると緊張しているのか体の節々に余分な力が入っているように見える。大丈夫だろうか……。
少女は双銃を構えて身構えた。
生物は標的を変えたのか双銃少女に向かっていった。
双銃少女は生物に銃を何発も撃った。
拳銃がこんな化け物に聞くのかと疑問に思ったけれど、この双銃

少女が撃った銃弾はこの生物を怯ませられる程には強いみたいだ。
というか、弾を補充してる様子がないのに撃ち続けているけど、どうなってるんだろう。
けど、怯ませるだけで生物がダメージを負っているようには見えない。銃を使った戦い方はよく分からないけど、双銃少女はただ銃弾を撃つだけで単調だ。
双銃少女の表情を見てみるとその顔には焦りが浮かんでいる。
このままじゃやられる。
（だったら）
俺は無口少女の傍を離れて双銃少女に気を取られている生物の後ろに来た。
あの子が普通にやって勝てないなら。
「こっちだ！」
俺が囮になって隙を作ればいい。
俺が叫ぶと生物がこちらに振り返った。
「なっ……！？　一体どういう――――」
双銃少女は驚いた顔をしている。無口少女の方は俺から離れた場所でやっぱり無表情だ。
「撃て！」
双銃少女はハッとして俺に気を取られた生物に向かって銃を向けた。
そして、手に力をかめたかと思うと、銃が光りだした。
生物が俺のほうに向かって来て前足を振り下ろそうとした瞬間に双銃少女は引き金を引いた。
銃からは５０センチほどの光の弾が飛び出し生物に命中した。
光の弾が命中した生物は出現した時と逆に歪んでいた空間が元に戻るように消えていった。
とりあえず何とかなったみたいだ。
こっちの無口少女の方は無事みたいだ。
さて、これからどうしよう。

俺は双銃少女の方へ目を向けた。
ひとまず、さっきのはなんだったのか、あの人に聞いてみるか。
このときに俺は気を抜いてしまった。
次の瞬間――――――体を何かに貫かれたような感触が襲ってきた。
何かと思って視線をおろすと、さっきと同じ様な何かに体を貫かれていることが分かった。
双銃少女は愕然とした表情で俺、というより俺の後ろを見ている。
多分あの生物がもう一体いたんだろうな。
目が霞んできた。
人は死ぬ瞬間に走馬灯と言うものを見るらしいけど、意識を失う直前に頭に浮かんだのは……なぜか無口少女だった。

◆

蓮は声を発することなくその場に崩れ落ちた。
双銃少女が銃を生物に向けるより早くその生物はその場から一瞬で消えてしまった。
「くっ……」
そう行って双銃少女は蓮に駆け寄った。
蓮の体には直径二十センチほどの大きな穴があいている。顔からは血の気が失せ、脈はなく目から光が完全に消えうせて何もない虚空を見つめている。
疑いようもなく、蓮は完全に事切れていた。
「私の目の前で……」
苦々しい症状で双銃少女は呟いた。
双銃少女はしばらくそのまま蓮の傍で佇んでいた。
一分ほど時間がたったところで不意に何かが動く気配がした。
双銃少女がそちらに振り向くと今まで黙って見ていた無口少女が蓮の所にやってきて座り込んだ。
「……？」

怪訝そうに様子を伺っている双銃少女の前で無口少女は蓮の体に手を置いた。
次の瞬間、無口少女に働く重力がなくなったかのように服や髪が浮かび上がった。
双銃少女はそれを意外そうに見ている。
しかし次の瞬間彼女の目が驚愕に見開かれた。
「なっ……！？」
瞬きをしたその一瞬の後、蓮の傷が治っていた。
ただ傷が治っているだけでなく服も元に戻っていてまるで何もなかったかのようになっていた。
無口少女はいつものように無表情で連から手を離した。
「あなたは……一体……」
双銃少女はなんとかその言葉を搾り出すことしかできなかった。

移動

「あなたは……一体……」
誰かの声が聞こえて俺の意識が浮上してきた。
目を開けると、いつもの無表情で俺を見下ろしている無口少女と手に二つの銃を持った双銃少女の姿が目に入ってきた。
俺が体を起こすと双銃少女はビクッと体をこわばらせてこちらを見ている。
「……あなた、どうもしないんですか？」
俺に話しかけられてると認識するのに少しかかった。目が覚めたばっかりで記憶がはっきりしない。
えーと……この公園にこの子ときて……変な生物に襲われて……この銃を持った女の子に助けられて……あの生物を倒して安心してたところでいきなりなにかに体を貫かれて……。
そこでハッとして自分の体を見てみた。
そこには傷はなく、服に穴すらあいていない。
「なんだこれ……一体何があったんだ！？」
何がなんだか分からずにとりあえず傍にいた双銃少女に聞いてみた。
「私にも何がなんだか分からないんですよ！」
けれど、なぜか俺以上にに混乱していたらしい双銃少女は俺の問いに対する答えは持っていないみたいだ。
けど、すぐに顔を引き締めてその手を軽く振ったと思うと、銃が一瞬で消えていた。
「すみません、名乗りもせずに……。私はエーテル・ノール。テレフタル王国・総合魔法学院の魔武科（アームズ）に所属しています」
名前以外は全く分からない自己紹介だ。知らない単語のオンパレードだ。
俺が何を言っているか分からないと言う顔をしているのが分かっ

たのか、このエーテル等いう少女は困ったような顔になった。
「聞いたことはありませんか……。やはりここの方たちは……」
俺から目をそらして何かを思案しているみたいだ。
「あのー。エーテルさん？」
俺が声をかけると「あっ」と声を出してこちらに向き直った。
「すいません対話中に……」
「いや、いいんですけど……それより、何があったんですか？」
さっきから気になっていたのはそれだ。
俺は確かにあのときにもう一体いたあの生物に体を貫かれた。
あの状態で生きてられるはずがない。
「それは私もよく分からないのですが彼女が……」
そこでエーテルさんが少女のほうを見た。
あの子はいつもどおり無表情でこっちを見てるけど……。
「彼女が？」
「……はい」
エーテルさんがやってないのならやっぱりあの子がやったんだろう。
けど、やっぱり本人に確認してみたい。死んで手はずの俺を生き返らせたというのはどうしても信じられない。
「お前が俺に何かしたのか……？」
「……」
そして少女が何かを言おうとして口を動かしたが言葉を出すことが出来なかった。
少女が言葉を発する瞬間――――――少女はいきなり現れた光の柱に包み込まれてしまった。
衝撃波が飛んできて俺とエーテルさんは吹き飛ばされそうになり、少女は気を失ったようにぐったりして光の柱の中で浮かび上がっていく。
「おい、今度は何なんだよ！」
「私にも分かりません！」

何が起こっているのかわからずに、ただ見ていることしか出来ない。
少女を包み込む光の柱は空のずっと上まで伸びていて端が見えない。なんとなくその柱を見ていると不安感が漂ってきた。
『禁忌の履行を確認』
「えっ？」
突然声が聞こえた。
エーテルさんのほうを向いてみると、彼女も俺と同じような反応をしている。空耳じゃないみたいだ。
『　実行者は名のない世界の代行者』
声は男か女かよく分からないような声で直接頭に響いてくる。
『実行者の消去を開始』
その言葉の後、少女の体が柱とは違う光に覆われていった。
消去？　消去ってなんだ？　何かを消すことだ。
じゃあ、何を消す？
目の前の少女は動かない。光の中でただぐったりとしている。
死んでいってるように――――違う、消えていっているように。
消えるのはあの子？
だとしたらどうする？
少女が本当に消えていっているとしても俺に何が出来る？
下手に手を出せば今度こそ取り返しがつかなくなるかもしれない。
あの子が消えても困ることはない。もともと全く知らない赤の他人だ。
赤の他人のためにそこまでする義理はない。
正直、少女に聞きたいことがあるのだけれど、リスクを犯してまで聞きたいかと言われればＮＯだ。
そう考えている間にもどんどん少女が消えていっている。
俺に出来ることはない。
あの子が消えてしまっても俺は日常に戻ってそれで万事解決――――
「なんて……するわけねーだろーがぁーーーー！！」

俺は足を前に出す。
確かにあの子は赤の他人だ。
けど、何があったかは知らないけど赤の他人の俺を助けてくれたらしいあの子をこのまま放っとくのか？
恩は必ず返す――それは俺が昔から実践してきたこと。
今それをしないのは今までの俺を否定するに等しい。
何も出来ないのと何もしないのは違う。
だから踏み出す。
何も出来ないとわかっていても。
手を伸ばす。
目の前の少女に。
「――――っ」
手が光の柱に触れた。
そして、柱が俺も一緒に包み込んだ。
もしかして俺も消えるのか？
けど、俺は行動したんだ。
やらずに後悔するよりはいい。
しかし、俺が消えることなく、急に光の柱は消えてしまった。
柱が消えて少女が重力によって落ちてきた。
俺はそれを受け止めた。
少女はまだ目を覚ましていないけれど、息をしている、そこに存在している。

光の柱が消えた後も、少女は眠り続けたままだったけれど確かに生きている。
もう本当にひと段落みたいなので、俺はエーテルさんに色々聞きたかったことを質問した。
「それで、諸々含めて一体なんだったんですか？」
その質問にエーテルさんは少々困った顔になって、
「教えたいのは山々なんですが……私もよく分からないことが

多くて……。それに、知っていることを教えても容易に信じるのは無理でしょう」
それでも、少なくとも俺よりはずっと今の状況に詳しいだろうし、それにさっきの色々を見た後ならどんな話でも信じられる気がするんだけど……。この人、型にはまったタイプなんだな。
「ふむ……手っ取り早く信じてもらうにはその目で見てもらうしか……報告も早くしたいし……だけど、かってにほかの世界の住人を連れて行くのも……けど、何も教えずにこの人が引き下がるとも思えないし……」
エーテルさんは俺に聞こえないくらいの小声で何かを呟いている。
「あなたは、何が起こっているのかを知りたいですか？」
「ああ。あんなことがあって何も知らないってのはさすがに……」
このまま何も知らずに分かれても、色々気になって仕方ないだろうし、何よりこの子の事を知らないわけには行かない。
「仕方がありませんね……。私も分からないことも多いし、手っ取り早く信じてもらうにはこうするのが一番ですね……」
だから、今の状況なら大体のことは信じられるって。
俺が心の中で軽く突っ込みを入れると、エーテルさんは何処からともなく手のひらサイズの何かの装置を出した。
怪訝に思う俺の目の前で、
「魔力認証。簡易転移装置起動」
エーテルさんが何かを言うと、その装置から淡赤色の光があふれ出し俺の目の前の空間に穴を作った。　さっきから何度も驚きの展開が繰り広げられてきたけど、今度のもかなり驚くに値するものだ。
「その穴は私が来た世界への道です」
少し誇らしげにエーテルさんは説明してくれた。
え……私の世界？
俺の唖然とした顔が面白かったのか、エーテルさんは少し微笑んで、
「詳しい説明は後でします。今は私に付いて来てください」

そういうなら、今は深く考えずにこの人についていこうと思って歩こうとすると、寝たままの少女の姿が目に入った。
この子をここにおいて置くわけには行かない。この子に関わる事でもあるし、このままつれていこう。
俺は少女を背負ってエーテルさんに続いて穴に向かって歩いていった。
「ああ、そういえば」
何かを思い出したようにエーテルさんが振り返った。
「私のことはエーテルと呼び捨てで結構です。敬語もいりません。歳もあなたとそう変わりはないでしょうし」
少し微笑みながら、エーテルさん、もといエーテルは穴に向かって入っていったので、送れずに付いていった。

穴の向こうには別の景色が広がっていた――――ということはなく、穴を通ると、そこはあたり一面が淡赤色の光であふれた何もない空間だった。上を見ても、下を見ても、左を見ても、右を見ても、見えるのは遥か彼方まで広がった淡赤色の光が見えてているだけ。
幻想的な場所できれいと言えなくもない。けど、こんなに光が明滅していたら目がちかちかしそうだ。
そんな空間をエーテルは真っ直ぐに進んでいる。道しるべもないのに何で迷わずに進めるんだろ……。
「なあ、こんな場所で道に迷ったりしないのか？」
俺が聞いてみると、
「いえ、この空間で迷うことはないんですよ」
「――――？」
「この空間はいわばある場所とある場所を繋ぐ通路のようなものです。しかし、道と言うのとは違います。ただ繋いだ結果生じた空間なんです。繋いだとはいっても空間を繋いでいるので距離と言う概念はありません。これは、特別な装置で作った特定の空間を歩いたと言う行動をある程度蓄積ことである空間からある空間へと移動し

ているんです。詳しい理論は専門ではないのでよく分かりませんが。」
「……」
さっぱり意味が分からないけど、ようは『何処を歩くかじゃなく、どれだけ歩くかが関係している』ってことかな？
そのまましばらく歩くと、彼方に入ってきたときと同じような穴が見えてきた。
「あれが出口です」
エーテルが指したその穴に近づいていくと背中で何かが動く気配がした。
「……」
「よう」
「……おはよう」
周りを確認した後、少女は俺が教えた教えたとおりの挨拶をした。
「ああ、おはよう」
生きているのは分かっていたけど、目を覚ましてくれて正直ほっとした。
「色々聞きたいことはあるだろうけど、今は黙ってついてきてくれるか？」
「……（こくん）」
言葉を出さない返答もちゃんとこの子が生きてるんだと実感した。
「……一人で歩ける」
そう行って、少女は俺の背中からするりと降りて横に並んだ。ちょっとこの子っぽくない反応だな……。
「着きましたよ」
エーテルがそう言って俺たちは穴に到着した。向こうは見えない。
エーテルが穴に入ったのを追いかけて俺と少女も穴の中に入っていった。
さて、穴の向こうの景色はどうなっていることやら。
あんな後なのに結構ワクワクしてるのは不謹慎かな……？

一瞬の世界

光のみの空間から出てみるとそこはどこかの建物の中だった。
その辺を見てみると、さっきエーテルが使った装置とは別の用途がよく分からない装置が散乱している。
後ろを見てみると、もう既に穴は消えていて穴があった場所にはひときわ大きな装置が鎮座していた。
その部屋を俺の知識の中で一言で表すと研究室（ラボ）と言うべきだろう。
その部屋の端で何かをごそごそ弄っている人影が見えた。
不審に思ってその人影を見ていると急にくりんと顔をこちらへ向けてきた。
「おーエルー。おかえりー」
振り返った人影は肩くらいまでの癖がある髪で人懐っこそうな顔で一目で何かの研究者と分かる白衣を着ていた。
「はい、ただいまです、アルデ。報告があるので今はこれで」
エーテルは軽く挨拶してさっさと部屋を出て行こうとした。
「いやいや、ちょっと位いいじゃんエルー」
エーテルは少し嫌そうな顔をしていたが、結局「仕方がないですね……少しだけですよ」と言いながら何だかんだでアルデと呼ばれた少女と話している。この二人結構仲良しなのかな？
「それよりエルー。貸してあげた装置動だったー？」
エステルは「ああ……」と何かを思い出したように、
「そういえば言いたい事があるんでした。あの空間で作った空間がすごく不安定でした。通るとき内心はすごくヒヤヒヤしましたよ」
「おー、それはごめんねー」
その能天気な返事にエーテルは深くため息をついた。
「あの～？」
なんだかこっちが置き去りにされてる気がするので声をかけてみた。

「おお、なんだ！？　何時から、どうやって、何をしに、何処から、何故、そして、君は誰だ！？」
大げさなリアクションで見事な５Ｗ１Ｈの質問をもらった。
置いてけぼりどころかこっちに気づいてもいなかったらしい。というか、エーテルの真横にいるのに何で全く気づかないんだ……。
「ああ、紹介が遅れましたね、彼らは事情があって一緒に連れてきた方達です。……ええと」
エーテルが俺たちの紹介をしてくれてるところで言いよどんでしまった。そういえば、まだこっちは名乗ってなかったっけ。
「俺は日比谷蓮。こっちは……名前を知られたくないみたいで」
「……」
「おおっ、僕はアルデ・アセトっ、アルデって呼んでね。総合魔法学院（ラーンズ）に所属する魔学者（マギカリスト）だよっ。よろしくねっ、蓮君、女の子っ」
そのまんまじゃねえか……。
「それで、さっき何の話してたんだ？」
さっき話の腰を折った自分が言うのもなんだが、何の話していたのか気になっていた。
「ああ、さっき使った簡易転移装置（ポータル）のことで話があったんですよ」
「あれってまだ試作段階でさー。今回エルに渡して試してみたんだー」
「まったく……。下手をすれば大変な事になってたかもしれないと言うのに」
「大変なこと？」
聞こえた不吉なフレーズに恐る恐るたずねてみた。
「さっき通ったあの空間はかなり不安定で何時崩れてもおかしくなかったんです。そうなってたら私たちは次元の狭間に放り出されて死んでいたかもしれません」
「あんたなんてモン渡してんだ！？」
「いや～」
アルデは照れくさそうに頭をかいている。

いや全く褒めてないからね！？　知らない間に命の危険にさらされて褒める人間がいるはずないからね！？
俺の心の中のツッコミを見透かしたようにエーテルは諦めたように、
「彼女はいつもこうなんです。自分が作ったものはとにかくすぐに試したいらしくて……。今回はやむなく自分から借りましたが、いつもは無理やり使わせてくるんです」
「いや～、狂魔学士（マッド・マギカリスト）としては研究の成果を一刻も早くなにをしてでも見たいと思うじゃん？」
「今『マッド』って言った！　マギカリストって言うのはよく分かんないけど、確かに『マッド』って言った！」
このアルデと言う人物から危険人物のにおいがプンプンしてきたぞ。
「ねえねえ、ところで蓮くん、エル、女の子」
「ん？　何だ？」「はい、何ですか？」
一気に早口でツッコンだので乱れた息を整えている俺と傍で聞いていたエーテルにアルデは言ってきた。
「エルが連れてきたって事は何か事情があったんでしょ？　こんな所で話してていいの？」
「「お前（あなた）が言うなあぁ――――――――――――――――――――――――――――」」
ラボ（？）の中に俺とエーテルの声がこだました。
そして少女はずっと無言で俺たちを見ていた。心なしか興味がありそうだったのは俺の気のせいだったかな？

部屋を出ると伝統がありそうな廊下が広がっていた。
あちこちにいろんな部屋があってさながら学校みたいだ。
先を歩くエーテルについていきながら、俺はその廊下を観察していた。
「全く、アルデときたら……いつもいつも……」

エーテルはさっきの事でまだぶつぶつ言っている。
それにしても、マイペースというかハイテンションというか変な子だったな。いつの間にか俺も向こうのペースに巻き込まれてたし。
この様子だとエーテルは前に何度もアルデに振り回されていたみたいだ。
「まあまあ。それで、俺たちは一体何処へ向かってるんだ？」
「聞きたいことがあるので報告も兼ねて教務室まで行こうと思っています」
報告って何のことなのかって気になったけど、着いたら教えてくれるみたいだし今はチャっチャと目的を済まそう。
そのまましばらく歩くとエーテルは何かの部屋の前で立ち止まった。
扉の表札を見てもなんて書いてあるか分からないけど、多分ここが目的地なんだろう。
「失礼します」
エーテルはノックをして扉を開けた。
部屋の中を除いてみると大人たちがせわしなく動き回っていてまるで職員室だ。教務室って言ってたけど同じものなのかもしれない
エーテルが中に入ったので俺と少女も付いていった。元々こういう雰囲気が苦手な上、変に緊張していたせいでぎこちなくなったけれど「失礼します」と言うのも忘れなかった。
この時俺は緊張していたせいで何も教えていないのに後ろで少女も「失礼します」と言って入ってきたのには気づかなかった。
エーテルが向かっていったのは入り口からそう遠くないところで書類仕事をしている女性のところだった。
「リーン先生。報告に上がりました」
リーンと呼ばれた人はゆっくりとした動作でこっちを振り向いた。
見た目は二十代前半くらいに見えるポワポワとした雰囲気をまとった女性だ。
「あら、ノールさん。予想より早かったわね～」

アニリンさんはさっきのアルデとは対照的にゆっくりとした動作で答えた。というより遅すぎる。
「それで、そちらの方は？」
今度は忘れられることなく、いの一番に俺たちのことを利いてきた。
「はい、彼らはあの世界から連れてきた方たちです。つきましては学長にも報告がしたいのですが」
リーンさんは口に指を当てて「う～ん」と悩んだ後
「分かりました、それでは学長のところに行きましょう」
と言って立ち上がった。ちなみに悩んでいたのは2分くらいだった。長すぎだろ……。

案内されたのはさっきの部屋からそう離れていない部屋だった。
まだ扉は開けていないけれど、なんとなく威圧感があるような気がする。
隣にいたエーテルを見てみると心なしか彼女も緊張しているみたいだ。
「失礼します～」
おいおい……。この人ノックもせずに入っていったけど大丈夫なのか？
手招きをされたので俺たちも中に入っていった。
「アーニ、お前はいつもノックをしろといっておるだろうが」
入ると同時に奥から声が聞こえてきた。
声の主は部屋の奥で手を組んで座っていた。
年のころは三十代半ば位で目は鋭くて全体から相手を威圧するオーラが出ているような気がしてしまう。正直めちゃくちゃ怖い。
「あらあら、申し訳ありません~」
まったく反省していないように聞こえるのは俺の気のせいか？
学長さんはそこはどうでもよさそうに女教師さんを見た後にエーテルに顔を向けて、

「まあいい。それで、エーテル・ノール。用件を聞こうか。後ろの二人についてもな」
そして学長さんは俺の方に目を向けてきた。目が鋭いのでギンと睨まれているような気がしてしまう。
「はい、まず初めに彼らは例の世界の住人です。依頼（クエスト）を受けてあの世界に行って少しすると彼らが《歪み（ディスト）》に襲われていたため救出を試みました。そして撃退した後、彼が事の事情を知りたい様子でしたので交流するのにもちょうどよいと考え、付いて来てもらいました。名前は彼が日比谷蓮、こちらの彼女は何か事情があるようで名前を知られたくないようです」
その説明で彼女の俺と少女を見る目が興味深そうになった。
「そうか……よく来た客人。私はエステル・W（ウィンディ）・ノール。この総合魔法学院（ーンズ）の学長をしている」
「初めまして」
俺は威厳のある自己紹介に少し恐縮しながら挨拶を返した。
「さて、長い話は苦手だ。わざわざこんなところまで来たということは、お前は何も知らない口なんだろう？」
ふと違和感を覚えた。まるである程度こっちの事情を知っているような聞き方だ。
こっちらがそう思っているのが分かっているのか彼女はそのまま続ける。
「ふむ、何処から話そうか……まずは今いる場所についてだが、ここは――――――」
「少なくとも俺がいた場所とは別のもう一つの世界で、ここは何かの教育機関ってところかな？」
俺がそう続けると彼女は「ほう」と感心するような声を出して口元にかすかな笑みを浮かべた。
さっきからちょくちょく出てくる単語や周りの雰囲気の事を考えればそれ位は分かる。
「頭は回るようだな。だが、満点とは言いがたい」

「えっ？」
「確かに、ここはお前がいたところとは別の世界でここが教育機関というのも間違ってはいない。しかし、もう一つの世界と言うのは誤りだ。この世には我々が観測しているだけで百以上の世界が存在している」
「……」
さすがにそこまでは想像していなかったな。他の世界という現状で俺も少なからず落ち着きをなくしているのかもしれない。
そして学長の説明にリーンと呼ばれていた女教師が「でも～」と口を挟んできた。
「この世界は正確には世界じゃないのよね～」
「――――？」
その言葉にエーテルが続ける。
「世界には必ず一つ、核の役割を果たすものがあると最近の研究で明らかになってきたんです。しかし、この世界にはそれに当たるものがないのです。だから、世界と言うより巨大な空間と言った方が正しいんです。そして、その影響かこの世界では時間が進みません。人と、人が動かしたもの意外は」
「ああ、それでずっと違和感を感じてたんだ……」
さっき廊下を歩いていたときにずっとなにかが変だと思っていたら、窓から見えた外の景色に全く変化がなかったんだ。空を流れる雲も、風も、チラッと見えた川も物理法則を無視して完全に止まっていた。
「それでこの世界は、正確には世界じゃないんだけど対外的には《一瞬（モーメント）の世界》って呼ばれてるのよ～」
女教師さんがそう補足を付け加えた。
そこまで話を聞いたところで、
「話がそれてしまったな。我々が普段していることの一つは世界の観測だ。新たな世界が観測されれば、こちらから赴いて友好を結ぶ。有益なようなら界交を結ぶ。それが我々が普段行っている事の二つ

だ。そして赴いた先の世界にもいろいろあってな、大抵は他の世界と界交を結んでいる世界がほとんどなんだが、時々どの世界とも界交を結ばず、他世界の存在すら認知していない世界がある。お前たちのようにな」

「……」

確かに、俺の世界にはパラレルワールドのような異世界という考え方は存在するけど、あくまでおとぎ話の類だ。

「そして、そんな中お前たちの世界を発見した。しかし、そこで問題があった」

「問題？」

俺が質問すると学長さんは、

「詳しい事は専門的だから省くが、お前達のいた世界は一度探した座標にあったんだ。ある時ちょっとしたミスで観測する座標が狂ってしまってな。その時にお前達の世界が観測されたんだ。前にその座標を観測したときは確かに何もなかったのに……。まるで急に現れたように世界が観測された。それで、いつものように気軽に赴くと言うわけにはいかなかった」

「だから私が先にその世界に行って調査をする事になったんですよ」

とエステルが学長さんの言葉を受け継いだ。「後は大体あなたが知っている通りです」と俺に言った後に学長さんが説明を再開した。

「それで、お前達を襲った生物だが、私たちは《歪み（ディスト）》と呼んでいる」

「ディスト？」

「ああ、すこし話を戻すが、この世には世界が百以上あるといったな？　そして、それぞれの世界は多かれ少なかれ例外なく構造的に不完全な『歪み』というものがある。そして、その『歪み』が大きくなり、世界の理から外れて実体化したものを《歪み（ディスト）》と呼ぶ。そして、その世界のものを無差別に傷つける。なぜそのような事をするのかは現在ではまだ分かっていないがな」

……なるほど。

けど、それだと腑に落ちない点がある。
「そんなのがいたら、騒ぎになるはずだけど、少なくとも俺はそんなの聞いたことないんだけど……」
そしてエステルが続ける。
「それと学長。私たちが遭遇した《歪み（ディスト）》ですが、私の知っているものと少し違いました。実態があるのに不完全ですが透明で、しかも同じ場所に二体の《歪み（ディスト）》が出現しました」
その報告に学長さんは顎に手を添えて何かを考える仕草をした。
「そのような姿の《歪み（ディスト）》や、そいつらが二体以上同時に同じ場所に出現すると言うのは今まで報告された事がないが……難儀だな……。まあいい、理由その他諸々は後で考えるとして、その後はどうなった？」
その言葉にエーテルは一瞬唇をかんで、言うのを躊躇ったが、苦々しそうに、
「……一体目を撃退した後に私が遅れをとってしまい、そこにいる彼がもう一体に体を貫かれて……絶命しました」
学長さんと女教師さんが眉をひそめたのが分かる。
当然だろう、死んだと言われた人間が目の前でピンピンしているのだから。俺もまだく何が起こったのか分からないし。
「彼が絶命した後に彼女が……」
その先を言わないのはエーテルにも少女が何をしたのか分からないからだろう。
この部屋にいる全員の目が少女に集まった。
「お前は、一体なにをしたんだ？」
学長さんが全員が聞きたいであろう事を少女に問いかける。
少女はゆっくりと口を開いた。何でもなさそうに、ただ聞かれたから答えたと言うように。
「彼の『体を貫かれた』という《記録》を消去した」
「なっ！？」「まあーー」「……」
三者三様の反応だけれど全員が驚愕の表情で少女を見た。何だ、

何がどうしたんだ？
「記録を消す？　そんなこと現実で出来るわけが……」
エーテルは呆然として呟いている。
「それは……さすがに信じがたいかも……」
女教師さんもさっきまでのポワポワとした感じが消えて真剣な表情になっている。
「……」
学長さんも落ち着いているようでも驚きの感情を隠しきれていない。
「エーテル・ノール。彼が一度絶命したというのは確かか？」
「……はい」
それを確認すると学長さんは少女の方を向いて、
「……本当か？」
学長さんは少女の目を見て問いかける。
「……（こくん）」
そしてそれを少女は肯定した。
俺以外の三人の間にさらに深刻そうな雰囲気が漂った。
「あの、さっきからどうしたんですか？」
学長さんがハッと気づいて「すまない、さすがに驚いてな」と言って、
「《記録》というのは言葉にするのは難しいが、強いて言うなら現在を構成する要素と言うべきか……経験、過去の集合とも言い換えれる。それに干渉するなんて事ができるなんて存在は……」
学長さんはその先を言いよどんだ。存在を信じられない、しかし信じざるを得ない。いろんな感情が混ざった声で確かに言った。
――――――神、と。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8890w/

世界は記録と神様と

2011年9月25日01時15分発行